

<「知るっば!久留米」 令和3年8月19日(木) 12:30~放送分>

久留米入城400年 ～第3回～ 「城づくりと有馬の都市計画」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 白木 守>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

8月は、『久留米入城400年』をテーマにお送りしています。ゲストはこの方です!

ゲスト:白木さん(以下「白木」)

こんにちは!久留米市文化財保護課 白木守です。

よろしくお願いします。

坂本 白木さん、よろしくお願いします。

3回目の今日は、『城づくりと有馬の都市計画』についてお話を伺います。

ゲストは交代して、今日から白木さんになっています。

先週までの大塚さんのお話では、豊氏が久留米に来たとき、

久留米城は廃城同然だったということでした。

そこからどうやって再建していったんでしょうか?

白木 まず、田中の時代までは久留米城の大手門は東向きだったんですね。

豊氏はこれを、南向きに付け替える所から着手します。

地形を考慮して、南側に城郭(じょうかく)を拡張する計画だったと思われます。

久留米城の本丸にはそもそも天守というのは築かれずに、代わりに中央に本丸御殿がありました。

さらにその周りには7つの櫓(やぐら)を置いて、それぞれを2層の多門櫓でつなげていたそうです。

坂本 南側に拡張する・・・、北側は川ですからね。

そもそも、なぜ天守がなかったのでしょうか?

白木 関ヶ原の戦いによって、徳川が政権を握ります。

さらに、大坂の陣によって豊臣家が滅んで、天下は泰平の世となりつつあったんです。

天守を建設するというのは、もちろん幕府の許可もいりますし、幕府への配慮もあったんですが、

政治を行うにあたって、より実務的な施設を築いていったと思われます。

坂本 明治時代初めの久留米城の写真が残っているんですけど、

そこには2層や3層の建物が少し見えるところもあるんですが、

どれくらいの大きさだったんでしょうか?

白木 高さの記録は残っていないのですが、南東隅にある巽櫓(たつみやぐら)が最も大きいんですね。これが、天守の代わりに物見の役割も担っていたようです。ちょうどこの場所が、久留米の城下を見下ろす格好の位置にあるんです。櫓というとなんとなく小さい櫓をイメージするかと思いますが、残っている石垣の高さは15mほどだと言われています。それから推定すると、巽櫓の高さは16~17mあったかと。すると、国宝の彦根城天守と同じくらいの規模だったと言えます。

坂本 なかなか立派な櫓だったんでしょうね。それから、現在も本丸の南側には堀が残っていますよね？

白木 本丸の堀と石垣が同時に見られる絶景スポットで、特に桜の季節には写真を撮られる方が多くいらっしゃいます。東側に久留米大学のグラウンドがあるんですが、その部分も低くて、かつては堀だったんですね。さらに、本丸から南に向かって二ノ丸、三ノ丸と続いています。本丸というのは政治の場なので、本丸御殿の絵図を見ても、広間というのがほとんどで生活臭が伝わってこないんです。藩主の生活の場は、二ノ丸。そして、三ノ丸には家老の屋敷がありました。

坂本 お城は、どの範囲まで広がっていたんでしょうか？

白木 だいたい今の市役所あたりまでですね。市役所の北側に市民駐車場があるんですが、その部分もかつての久留米城の外堀にあたります。

坂本 へー、ずいぶん広いんですねえ。そこまでが、いわゆる城内ということになりますか？

白木 そうです。一般的に城内と呼ばれる範囲がそこまでで、外郭(そとぐるわ)には、上級武士の屋敷が80軒ほどあったようです。

坂本 外堀の痕跡とか、今は残っていないんでしょうか？

白木 実は、明治時代になってお城の堀はほとんど埋められました。それでも、今でも水路として使われている部分だったり、不自然に斜め方向に走る道、もしくは町境なんかには堀の名残を見ることがができます。

坂本 あー、なんか NHK の番組「ブラタモリ」の世界ですね。痕跡が…とか、境目が…とかね。

白木 車で走っていると多分意識はしませんが、歩いていると微妙なアップダウンが気になったり、特に自転車だと、「きついなー」と感じるところが、実はちょっとした坂だったりとか。

坂本 街中にも高低差を感じられる場所があるのはなかなか面白いなと思います。
まさに、またまた「ブラタモリ」なんですけども。(笑)
実際の城づくりも、こうした高低差を意識してやっていったということなんですか？

白木 実は、高低差というのが強く意識されていて、
城下では本丸がある場所が最も標高が高いんです。
次に二ノ丸、三ノ丸。さらにその周りに広がる外郭とか武家屋敷のある部分が高くて、
町屋部分は一段低い場所に作られています。

坂本 武家屋敷もあちこちに作られていますよね。
場所によって身分の上役とか下っ端とかあるんですか？

白木 実は、今の京町にあたる京隈小路と櫛原町の櫛原小路というのがありますが、
そこには上級・中級武士が多く住んでいて、
荘島とか螢川あたりには、下級武士が居住していたということがわかっています。

坂本 住むところによって位が違うということですね。
久留米を代表する画家の坂本繁二郎と青木繁が、それぞれ京隈と庄島(現・荘島)の出身で、
その祖先は武家だったということなんですけども、復元されている生家や旧居を比べても、
結構大きさが違いますよね。

白木 そうなんです。実は繁二郎生家の敷地は450坪あるんです。
一方、青木の旧居は、おそらく90坪程度ですかね。
繁二郎生家というのは市内で現存する唯一の武家屋敷で、市の指定文化財にもなっているんです。

坂本 繁二郎さんという価値と、唯一の武家屋敷という価値と2重に価値があるということで。
それでも1軒の屋敷がそれだけ広いというのは驚きですよ。

白木 学校に例えると、京町小学校は、当時の武家屋敷4軒分なんです。
篠山小学校や日吉小学校は、6軒分の屋敷の敷地でひとつの学校ができていて、
これだけでも、いかに上級武士の屋敷が広がったのかが分かるんじゃないかと思います。

坂本 出世しないといかんなと思いますね。(笑)
これまでの話をまとめると、久留米城は4重の堀に囲まれて、外側にはいくつも武家屋敷があって、
城の守りを固めていたというような構造だったということですね。

白木　そして西側には天然の要塞となる筑後川が流れ、西に京隈、南に庄島、東に櫛原や十軒屋敷という武家屋敷を配置して防御を固めていたという構造です。

坂本　よくわかりました。

城と武家屋敷の配置が整い、どのようにして城下町ができていくのか、非常に楽しみです。

この続きは、また来週にお話をいただきたいと思います。

第4回は、『久留米市街地の基礎を築く』をテーマにお聞きします。

楽しみに。